CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 14

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）

特集＿＿ 追悼　重松 敏則理事長を偲んで　p1
重松敏則先生のご業績　p3
重松先生の思い出　p4
報告＿＿ リーダートレーニング研究会　p7
今後の活動方針など / お知らせ　p8

特集　追悼　重松 敏則理事長を偲んで

■ はじめに

朝廣和夫　（九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN副理事長）

NPO 法人日本環境保全ボランティアネットワークの重松敏則理事長（九州大学名誉教授）は、2016 年 8 月 22 日、ご自宅で永眠されました。享年 71 歳、あまりにお早い他界でありました。本号は、重松敏則先生のご活動の振り返り、ご業績のご紹介、法人としての近々の活動、今後の方針について、ご報告させていただきます。なお、本紙面では、理事長ではなく、先生と呼ばせていただきます。それは、学問に身を捧げてこられたことに加え、里山保全の活動家として、多くの市民団体の育成にご指導をいただいたからです。

少し、先生のお身体のことについて触れさせていただきます。先生は生前、「もっと身体が強かったら、バリバリと里山保全活動ができたのにな～」と口にされていました。子供の頃から患った喘息は、長年の、真摯で、厳しい教育・研究活動の中で、時折、悪さを行いました。大学での在任中も、数週間入院されることもあり、ある時は、体調がすぐれないのに他県に講演に行かれることもありました。退職後、本法人を設立し、活動を継続いただきました。この２年近くは酸素ボンベを携えながらも、必ず理事会、研究会に参加されました。そのお姿に、強い思いを感じるばかりでした。

限りある誌面の中で、3 ページの略歴等を参照し、先生のご活動を次の 4 期に分けて、ご紹介させていただきます。

◇1975～1987 年頃の大阪府大時代

1975 年、大阪府立大学農学部造園学研究室の助手となられた先生は、恩師の高橋理喜男先生より「里山の研究をしなさい。そういう研究が必要な時代が来るから。」と研究テーマを与えられたと伺いました。先生は、関西の里山を対象に、雑木林の間伐率、林床植生の草刈り頻度の実験条件を違えた実証的研究を進められました。これは、1987 年に博士論文「レクリエーションを目的とした二次林の改良とその林床管理に関する生態学的研究」として取りまとめられ、1991 年に「市民による里山の保全・管理」の書籍として出版されました。この本は、里山保全団体のバイブルとも言われ、各地での市民による保全活動の契機の一端を担ったと言えます。先生は授業やご講演で、「市民参加の森づくりは、こんなに楽しいんや。」、「ゴルフの道具は何万円もするけど、里山管理は手ノコや軍手があればできるんや。」、「低木を伐ると、みるみる林内が明るくなり、達成感があるんや。」、「サラリーマンのお父さんが汗を流せば、子供が『すごいね』って言うんや」などなど、里山保全ボランティア活動の楽しさ、素晴らしさについて、熱心に、言葉を選びながら講話をされました。実証実験、現場の実践活動に裏付けされ、丁寧に書かれた文章、図表、挿絵、お話は、確かな説得力を持ち、我が国における里山保全活動の端緒を開かれたと言えます。

◇1990 年頃のロンドン大学滞在

先生は、1990 年に在外研究員としてロンドン大学ワイカレッジに滞在されました。当時、景観保全の先端的研究を担っていた大学であり、そこで、出会われた団体が英国環境保全ボランティアトラスト（BTCV: British Trust for Conservation Volunteer, 現 TCV: Trust for Conservation Volunteer）でした。この団体は、土地を所有せず、ボランティアリーダーを育成し、保全対象地に一般ボランティアと一緒に派遣する、いわば、ボランティア・ツーリズムの先駆けとなった団体です。先生は、都市の住民が雑木林管理、伝統的な生垣の保全、生物多様性に資するため池の管理などに、気軽に参加できる取り組みに、確信的な解を、すなわち、現代における様々な環境問題・社会問題を解決する糸口を見出されたのです。

◇1994 年～九州芸術工科大学へ

様々な里山保全の市民活動を和歌山の橋本、大阪、兵庫、香川で仕掛けられて間もないころ、先生は、九州芸術工科大学芸術工学部環境設計学科の教授として迎えられました。里山団体の方々からは「先生、なんで行ってしまうんや～。」と惜しまれながら、後ろ髪引かれる思いでのことと言われていました。先生は、福岡県黒木町に所在する市民団体山村塾の設立が間もないころ、英国の BTCV と連携し「国際里山・田園保全ワーキングホリデー」という、約 1 週間から 10 日間の合宿ボランティア活動を開始されました。これは、その前にも、和歌山、香川や兵庫でも実施したものです。福岡では、棚田の石積み、林内の散策路づくりなど、国内外のボランティア、学生が寝食を共にし、額に汗をかきながらの、それは充実した活動でした。この活動は「新しい里山再生法～市民参加型の提案」という書籍にまとめられ、九州の里山保全活動の 1 つの流れと言えます。

◇NPO 法人 JCVN 時代

九州大学を退職された先生は、本法人を設立されました。先生が当初より立てられた目標は、「いつでも、誰でも、どこでも、里山保全、環境保全活動に参加できる全国組織を実現する」でした。実は、設立にあたって様々な議論がありました。福岡に所在する団体が「日本」という団体名を冠するには名称が大きすぎる。構成する理事は本職が忙しく BTCV のような事業展開は難しい、などなど。この議論は、今でも続いている論点です。先生の意志は堅く、「早く主旨を実現するため、できることをする。」と、強く示されたのです。

BTCV のようなプロフェッショナルなボランティアツーリズムサービス、人材育成活動などを展開するには、専従職員を擁した体制、事業獲得のための営業活動などが必要でした。しかしながら、先の理由により、現在の活動のような人材育

1995 年　愛知万博　重松先生（右端）

成を足掛かりに、関与する団体と連携し活動を広げていく取組となりました。先生は、時として著書の出版、助成金の申請、団体ロゴの提案を提起され、著書では2010年に「よみがえれ里山・里地・里海～里山・里地の変化と保全活動」が出版され、今年度も、新たな著書の目次を提示され準備を開始した最中でした。助成金の申請、ロゴの提示に至っては、先生の先ゆく示唆に、私たちは十分応えられないこともしばしばでした。歳と共に、急がれる先生のお気持ちは、周知の事でした。

先生の示される目標は常に高く、早く、行動をもって実現させる。その徹底した活動指針は、実際、多くの事を生み出して行きました。その最も大きな成果は、その理念を継承されていった各地の市民団体であり、多くの卒業生と言えます。英国のような「いつでも、誰でも、どこでも里山保全に参画できる社会」、それは、未だ道半ばです。社会は現在も、文化や環境をないがしろにし、近代化、都市化、過度の生産・消費を急いでいるからです。先生の示したボランティアは我が国でいう地域奉仕活動ではありません。それは、国民から、市民活動から社会を変えていくという、市民社会であれば、当然、成すべきことなのです。先生の徹した姿勢は、その先駆けに違いありません。里山保全を郷愁と終わらせるのではなく、今の時代に必要とされる創造的なサービス活動に転換してく、先生の逝かれた後に、私たちは新たな使命を担っていると考えます。社会が気づくその前に考え・行動する。そのような教えを大切にしていきたいと思います。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

■重松敏則先生のご業績

◇略歴

1945年 愛媛県生まれ
1970年 大阪府立大学農学部園芸農学科卒業
1972年 大阪府立大 大学院農学研究科修士課程卒業
1974年 （株）プレック研究所入社
1975年 大阪府立大学農学部造園学研究室助手
1987年 博士論文「レクリエーションを目的とした二次林の改良とその林床管理に関する生態学的研究」を提出・審査により、農学博士の学位を取得
1990年 ロンドン大学ワイカレッジで客員研究同年、大阪府立大学農学部講師
1994年 九州芸術工科大学(国立）環境設計学科教授
2003年 九州大学大学院芸術工学研究院教授
2009年 九州大学大学院芸術工学研究院を定年退職。九州大学名誉教授
同年、NPO法人日本環境保全ボランティアネットワーク (JCVN)理事長に就任

◇主な業績

造園学、特に里山保全の分野で、「二次林のレクリエーション的活用に関する生態学研究」を推進し、顕著な業績を挙げた。

管理が行き届かず荒廃する農山村や都市近郊の里山や里地、緑地などの環境保全・景観保全・生物多様性保全、ならびに、これらの持続的な活用について研究を推進するとともに、地元住民や都市住民・青少年などのボランティアによる環境保全・復元活動などの展開を目指し、もって美しく、持続的な国土環境の保全と参加型の安定した社会の形成に、真摯に尽力された。

日本造園学会 論文賞 （平成元年）の発行（紀要）に対して授与

◇主な著書

1) 重松敏則：「市民による里山の保全・管理」、 信山社サイテック、1991
2) 石井 実・植田邦彦・重松敏則：「里山の自然をまもる」、築地書館、1993
3) 重松敏則：「新しい里山再生法～市民参加型の提案」、(社)全国林業改良普及協会、1999年
4) 重松敏則＋JCVN(編)：「よみがえれ里山・里地・里海～里山・里地の変化と保全活動」、 築地書館、 2010年

1995 年　作詞作曲された里山賛歌を歌唱

2009 年　最終講義での花束贈呈

理事長と理事

重松先生の思い出

■重松先生とこうのす里山くらぶ

志賀　壮史（JCVN 理事、NPO 法人グリーンシティ福岡 理事、こうのす里山くらぶ代表）

ある植物好きの福岡市職員の方から重松先生に「鴻巣山で市民参加の里山保全ができませんか？」と相談があったのがきっかけでした。

福岡市中央区と南区の境に位置する鴻巣山は福岡市で最大の緑地保全地区です。ここを舞台に、1999 年に「鴻巣山保全計画づくりワークショップ」を４回、2000 年に「鴻巣山森づくりワークショップ」を９回開催しました。

その間、重松研究室の部屋を解放しての運営ミーティングには、鴻巣山の近くの住民や森林ボランティア団体の会員、造園業者、行政職員、学生などが集まりました。ワイワイと話す様子に、重松先生がニコニコと意見に耳を傾けていらっしゃったのを思い出します。

この頃のことを「騒々しくも伸びやかで自由な研究室」「何も干渉されず、遠慮なく意見を述べ、存分に議論を戦わせることができた空間」と回想する方もあります。重松先生の研究室での出会いは、その後、森林ボランティア団体のゆるやかなつながりである「ふくおか森づくりネットワーク」の発足や、私が所属する「NPO 法人グリーンシティ福岡」設立の一因になったと思います。

１年間の準備期間を経て 2002 年に「こうのす里山くらぶ」が発足。現在までの約 14 年間、ヤマザクラの救出などを目指してマテバシイやタブノキの間引き、枯れ木の撤去をマイペースで行

ってきました。

大学を退官後、重松先生はよくお孫さんを連れていらっしゃいました。除伐やどんぐり粉づくり、時にチェーンソーで丸太を玉切りしての薪づくり。会員の子どもたちには「チェーンソー先生」と呼ばれていました。

当初の目的であるヤマザクラ救出はなかなか果たせていません。けれど、森に来る人に事故が無いように枯れ木を処理したり、子どもたちが多い日はハンモックでぶらんぶらんしたり、のんびりと町の人が身近な森の手入れをする活動になりました。

重松先生が蒔いた種がここでも咲いているのだと思います。

■二ホンミツバチとの対話

平 由以子（JCVN理事/特定非営利活動法人循環生活研究所理事長）

「ミツバチの巣がモヌケノ殻や。あんなにあったハチミツを抱えて、たったの２日間で引っ越してもうたんや」「何が気に入らんかったんかなぁ」と、眉をひそめ肩を落としている重松先生。ことの一部始終を語り始めると、小さな世界で何が起こっていて、驚異の営みが存在するかの言葉が次から次に出て止まらない。こうした報告を少年の表情で重松先生から聞くことが、JCVN 活動の楽しみのひとつでした。そして、惜しみなく細かにその生態や、飼育、蜜の採取の方法を私たちに教えてくれました。

さまざまなご苦労と試行錯誤を重ねられ「ハチミツを JCVN の商品にしよう」と、瓶の調達やパッケージを自ら手掛けられ、商品化した貴重なハチミツを私たち NPO で販売することになりました。ハチミツの味のまろやかさ、純粋さは大好評で、生産を待つロイヤルユーザーがすぐにつきました。すでにご存じだと思いますが、二ホンミツバチの蜂蜜は、江戸時代の文献では「百花ノ精」と賞讃されています。蜂の習性と独特な採蜜法により、小さな花からさまざまな種類の花蜜がブレンドされた形で存在しているのが特徴です。それだけに栄養が豊富でコクがあり、古来より「通 」の人々の民間薬・滋養食とされてきました。

今年の行く夏に突然にやってきた先生の訃報

晩年に体調を悪くされた先生が、ミツバチとのふれあいで活力が充満し元気を出されて行く姿は、私たちの心に刻まれ、自然と人間の関係性の構築の大切を改めて教えてくれました。

寡黙なミツバチといくつかの季節を過ごされ、季節の移ろいを細かに感じ、一喜一憂しながら自然との対話を心から楽しんでいました。先生のそれは、決して人間が作りだすことのできない、いとなみ、翅の音、蜜の色、自然の香り、そのひとつひとつの発見に心躍らせているようでした。

菜園や高原に立ち、小さな生き物に出会ったとき、笑顔の先生が浮かびます。先生との想い出は痛みに変わることなく、楽しさで満たされ、そのままの存在感で心の中に存在します。このまま私たちは、先生とハチたちの小さな物語を語り、二ホンミツバチを育て、都会の住民のみなさんが自然との対話を楽しめる場所づくりをつくるつもりです。いつでも、誰でも、どこでも参加できる環境保全活動を広げるための先生の意思を、次世代に引き継ぎたいと思います。

■重松先生への感謝

塚本　竜也（JCVN 理事、NPO 法人トチギ環境未来基地　代表）

重松先生は、福岡からは遠く離れたところで活動している NPO 法人トチギ環境未来基地のこともいつも応援をしてくださいました。活動報告をお送りするたびに感想を送ってくださったり、ご寄付をいただいたり、支えてくださいました。また、東日本大震災発生後、福島県いわき市で海岸林の再生活動を始める際にはプロジェクトへの応援メッセージを書いてくださいました。

「『浜辺の歌』でイメージされる白砂青松の美しい海岸林は、日本の大切な原風景の一つで、是非とも子供たちや未来の世代に継承したいものです。松枯れや砂浜の波浪による侵食で、全国的に衰退している実状の中で、津波で失われたいわき市の美しい海岸林をみんなの協力で再生することは、大きな意義があると思います。是非、モデルプロジェクトとして実現し、全国の白砂青松の海岸林の復元に繋がることを期待しております」　重松　敏則とても大きな励みになりました。

それから、東日本大震災後の災害ボランティアセンターでの活動を通じて、現場のリスクマネジメントやボランティアコーディネーションの不十分さや課題も見えてきました。そのことで JCVN の理事に講師としていわき市に来ていただき、リーダートレーニングを実施しました。そのことを重松先生にご報告した際、大変喜んでくださいました。先生は、ご専門の里山や環境保全だけでなく、里山保全活動で培った知見を他の活動にも生かすことに積極的でした。その考え方やその先の可能性に大きな影響を受け、私たちは今も活動をしています。

■重松先生と山村塾の出会い

小森　耕太（JCVN理事、NPO法人山村塾　事務局長）

先生と山村塾との出会いは、1995 年の山村塾設立間もない頃です。1991 年の台風による風倒木被害地に植樹した広葉樹の育ちが思うようにいかず、大阪府立大から九州芸術工科大学に赴任されたばかりの重松先生を訪ねました。その出会いがきっかけとなり、英国 BTCV が行う合宿ボランティアを日本に根付かせたいという重松先生の思いと多くの人達に山村の魅力を伝えたいという山村塾の思いが重なり、1997 年に国際ワーキングホリデーがスタートしました。英国 BTCV との連携は 1997～2006 年の 10 年間にわたり継続し、国内外の多くの人達が、四季菜館はじめ黒木町に訪れ、棚田や森林で汗を流し、互いに交流を深めました。当時、重松研究室と山村塾とで、国際里山・田園保全ワーキングホリデー実行委員会を立ち上げ、二人三脚で企画から運営に取り組み、農家メンバーと先生、学生たちとで立場を超えて深夜に渡る議論を行いながらイベントを作ってきたことを思い出します。

私個人としては、1997～1999 研究室在籍中から 2000～2016 山村塾スタッフとして活動する中、長きにわたり指導いただきました。ＮＰＯで働くことが珍しかった時に、それを支え後押しして下さいました。「小森君、そんなこと言うとったらあかんで～。破門や～！」と怒られることも多々ありましたが、ここ数年は、山村塾が新聞記事に取り上げられると電話があり、「たいしたもんや～。小森君みたいな人にもっと頑張ってもらって、若い人を育てて欲しいなぁ。」と応援していただきました。本当は先生ご自身がもっと里山でいろいろな活動を展開したかったんだろうと、その思いが期待として伝わってくるようでした。

重松先生の期待に応えることができるよう、里山賛歌を思い出しながら、これからも里山をフィールドに精進したいと思います。先生！ありがとうございました！

実施報告　リーダートレーニング研究会

■第20回「ヒヤリ！とした経験を人材育成に活かす」

志賀　壮史（JCVN 理事、NPO 法人グリーンシティ福岡理事）

第20回となるリーダートレーニング研究会のテーマは、日々の現場やイベントでのヒヤリとした経験、いわゆる「ヒヤリハッと」でした。

と　き：2016 年 8 月 18 日 18:30-20:30
ところ：あすみん会議室（福岡市中央区）
参加者：会員 5 名　非会員 1 名
内　容：・進め方説明
　　・実習「ヒヤリハッと研究」
　　・ディスカッション
参加費：一般＿1,000 円／会員・学生＿無料

現場でヒヤリとした出来事があったとします。それにきちんと気付き、スタッフで共有し、記録する。その上で定期的に振り返って安全管理上の改善点をスタッフで話し合おう！という提案。

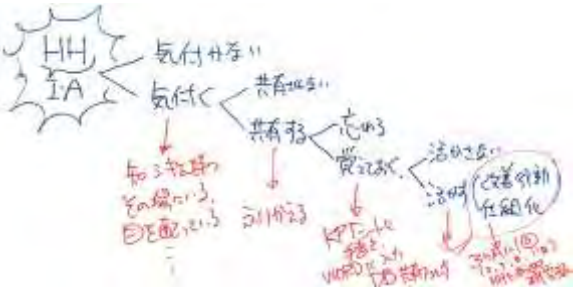
グリーンシティ福岡で四半期に一度行っている「ヒヤリハット研究」をもとに、同様のワークを行いながら、団体のリスクマネジメントと人材育成について話し合いました。流れは以下の通り。

０）毎回の活動やイベントで、事故やヒヤリハッとを記録しておく。
１）四半期に一度、「ヒヤリハッと研究」を行う。記録をもとに三ヶ月分のヒヤリハッとを読み上げる。
２）気になった事例を選び「なぜ起きたのか？」「なぜそう判断したのか？」を掘りさげる。
３）その事故を防ぐための対策を考える。
４）対策を忘れずに実行するための「仕組み化」を考える。

この日の研究会では、それぞれの団体から持ち寄ったヒヤリハッと事例を共有しつつ、その原因や予防策を話し合いました。

特に最後の「仕組み化」の部分がポイントです。「当日進行表の書式にチェックリストを追記する」「注意事項を防水シールにして道具に貼付ける」など、精神論や根性論でなく、不慣れなスタッフやボランティアにもわかりやすい具体的な方法がよいでしょう。

起きてしまった事故やヒヤリハッとをそのままにせず、今後の改善につなげていくことが大切です。



■第21回「「リーダーズアクションガイド（仮題）の作成」

小森　耕太（JCVN理事、NPO法人山村塾　事務局長）

これまでＪＣＶＮで培ってきた人材育成のノウハウを書籍にして、広く社会に紹介しよう！という重松先生の提案からガイド作成を目指すことになりました。資金は？内容は？ターゲットは？と課題はいろいろありましたが、まずは少しずつでも書けるところから書いていくことを目指します。ガイド作成の初回は「第 1 章リーダーとリーダシップ」。環境保全活動を支えるリーダーのあり方、ＪＣＶＮが何を目指すのか、その思いが込められたところです。一般参加はありませんでしたが、福岡在住の理事たちで熱のこもった議論が行われました。なかなか良いものができるような気がしています。まだまだ先のことになりますが、どうぞご期待ください。

とき：2016 年 10 月 20 日 18：30-20：30
ところ：あすみん
参加者：会員 4 名
内容：第 1 章リーダーとリーダシップの読み合わせ、ガイド全体の構成について

今後の活動方針など

◇今後の活動方針

理事会の運営について、現在、理事長が不在の状況です。当面、副理事長が代行を務め、次期総会を含め、１年程度、今後の活動方針を議論し、新体制の検討を進める予定です。

◇ご寄付へのお礼

重松朝子様より、先生の葬儀等でいただいたお香典の一部を本法人にご寄付としていただきました。ここに謹んで御礼とご報告を申し上げます。

お知らせ

イベント・ボランティア情報

●JCVNリーダートレーニング研究会

JCVN では､隔月で環境保全リーダーのためのプログラム研究会を実施しております｡リーダーの方､関心がある方､私たちと一緒に活動したい方のご参加お待ちしております。

◇12月15日（木）

＜内容未定＞
とき：18 時半～20 時半
場所：福岡市 NPO・ボランティア交流センターあすみんセミナールーム
参加費（会員・学生）無料　（非会員）1,000

◇2月16日（木）

とき：18 時半～20 時半
場所：福岡市NPO・ボランティア交流センター

●JCVNリーダーミーティング2017

◇2017年2月11日（土）

内容：　未定
場所：　未定

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります｡入会申込書をご送付いたしますので､事務局までお問い合わせください。

JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が､年に3回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。

活動への寄付も受け付けています｡環境保全団体のネットワークづくり､リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

・個人正会員（¥10,000／年）
・個人賛助会員（¥5,000／一口以上）
・団体正会員（¥20,000／年）
・団体賛助会員（¥10,000／一口以上）

［会費・寄付振込口座］

番号：０１７６０－９－１２２４０７

名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

CONSERVATION VOLUNTEERS　１４
■発行日：平成２８年１１月１７日
■発行頻度：年3回
■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）
■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: jcvn@greencity-f.org